

# 大学史研究の成果と動向

——S・ロウスブラット論文『近代大学史の研究と執筆』の紹介——

加藤 詔士

## 目 次

- 一 近代大学史研究の成果と動向
  - 1 大学史への関心の高まり
  - 2 大学史研究の書誌的考察
- 二 ロウスブラット論文「近代大学史の研究と執筆」(翻訳)
  - 1 大学史研究の基本的性格と特色
  - 2 多彩で学際的な大学史研究
  - 3 大学史研究の検討課題

## 一 近代大学史研究の成果と動向

### 1 大学史への関心の高まり

#### (一)

『オックスフォード教育学評論』は、一九九七年の六月号を「大学史を執筆する」という特集号にあてている。<sup>(1)</sup>このような特集号が組まれたことは、大学史への関心の高まりのあらわれとみられる点で注目される。本稿は、同誌に所載された一編で、「近代大学史の研究と執筆」とでも題されるS・ロウスブラット論文を、翻訳紹介しようとするものである。

大学史への関心の高まりは、今に始まったことではない。「ここ三〇年ほどのあいだ、大学史は今まさに始まろうとしているあたらしい研究テーマであるといわれてきている」。<sup>(2)</sup>もともと「大学史の執筆は一六世紀に始まる好古趣味の伝統に端を発しているが、ほかの歴史の執筆と同じく、そうした伝統からの解放が急に始まった。それは一つには一九世紀の学問の専門分化の結果としてであり、また一つには歴史家たちが現代関心事の伝達手段としてそれを用いるいろいろな方法を見いだしたことからである」。<sup>(3)</sup>とくに一九六〇年代の末ごろ以降、中世大学から近代大学までを包含した一つの学問分野として、大学史研究が本格的に進展してきているように思われる。

#### (二)

大学史への関心の高まりは、大学史一般の研究についても個別大学史研究についても認められる。

まず、大学史一般の研究として代表的な著書をあげるとすると、次のようなものがある。いずれも、「近代大学における変化のプロセス、それと社会変化との関連について、歴史的にも現代的にも意義ある問題を提起した」著作である<sup>(4)</sup>。

- ① S. Rothblatt, *The Revolution of the Dons : Cambridge and Society in Victorian England*. Faber and Faber, London, 1968.
- ② L. Stone ed., *The University in Society*. 2 vols., Princeton U. P., Princeton, 1974.
- ③ R. D. Anderson, *Education and Opportunity in Victorian Scotland : Schools and Universities*. Clarendon Press, Oxford, 1983.

第一書は、本稿で紹介する論文の筆者S・ロウスブラットの著作であり、ヴィクトリア時代における大学の変容を、社会変化との関連で取りあげている。英国でもっとも保守的な大学の一つであるケンブリッジ大学が、若いジェントルマンのための教養学校から近代的な専門的知識の学校へ変容するさまを、カリキュラムや制度上の変化の分析をとおして明らかにしようとした注目作である。第二書も、書名が示すように、大学と地域および社会との相互関係の諸相を分析した著作である。大学教師だけでなく学生についても考察対象としたという点でも、注目される。一九世紀初期プリンストン大学の学生生活、一五八〇年から一九〇九年に至るオックスフォード大学の就学者構成の変化、一八世紀のオックスブリッジにおける学生文化の高揚(筆者はロウスブラット)、などをめぐる論文が収められている。ちなみに、同書の一巻は「一四世紀から一九世紀までのオックスフォードとケンブリッジ」編、第二巻は「一六世紀から二〇世紀までのヨーロッパ、スコットランド、アメリカ合衆国」編である。

第三書もまた、近代スコットランドの社会文化史ならびにできるだけ広く比較史的な背景のなかに、大学を位置

づけて考察している。具体的には、「市民と大学側の関係が大学におよぼす影響、大学教師の専門職化、地元の専門家や子弟がいつかは就職するよう期待される中産階級の父兄から大学に寄せられる諸要求、大学の学生募集に対する地元の就職市場の影響、全国的な高等教育制度の策定（一九二〇年以後）」<sup>⑤</sup>といった諸点を分析した労作である。

近年、大学史研究の専門誌があらわれたことも特筆される。一九八一年には『大学史 (History of Universities)』が創刊されたし、一九九〇年代になると、『オックスフォード教育学評論』が「大学史を執筆する」という特集号を組んだ翌年の一九九八年には、大学史の国際雑誌『大学史年報 (Jahrbuch für Universitätsgeschichte)』がドイツで創刊されたのである。同誌は、社会史研究の専門誌『歴史と社会 (Geschichte und Gesellschaft)』を範として編集されている点<sup>⑥</sup>でも注目される。

個別大学史研究についても、同じような傾向が認められる。社会のなかの大学の歴史像を分析するという研究志向が顕著であり、そのなか、八巻からなるオックスフォード大学史の刊行事業が一九六八年に企画され、一九八四年から刊行がはじまった。制度、社会経済、建築、思想といった幅広い側面を、学内・国内・国際的な出来事とむすびつけて考察するという大がかりな企画である。アバディーン大学も一九八五年から五〇〇年史研究叢書を刊行する事業に着手し、大学の成立初期にみられた諸問題、カリキュラムおよび教育方法、学生たちの日々の生活、大学の政治史、という諸点を考察している。バーミンガム大学やストラスカイド大学などでも、自己の大学の沿革史が創立記念事業の一環として刊行されているが、そのさい、祝賀記念誌的なものから分析的な方向へという傾向がみられることが特筆される。創立記念祭が一大刺激剤になって個別大学史研究が盛んになっているのだが、内容は「個々の機関の物語を記録し著名な先祖をたたえるというかつての支配的な伝統」に従うのではなく、「できうるかぎり広い背景で、すなわち社会的・政治的・経済的・知的・文化的な背景のなかで解釈しよう」という志向が

みられる。しかも、「歴史を記念の印として扱う方法と歴史を批判していく方法とのあいだにある根強い緊張関係がみえる」のである。<sup>(7)</sup>

大学の歴史が執筆され刊行される体制、ならびに全体的・通史的叙述から問題史的叙述へという叙述のスタイルにおける変化もまた、みられる。多くの研究者が参画し、執筆者各人はそれぞれ専門とする領域ないし特定テーマを担当し、主題ごとの何冊かの本からなる叢書形式で刊行したり、主題ごとに一章をあててこれを各人に分担せるとかいう方式である。さらにもう一つ、内外の他大学を視野におさめてそれとの比較考察にもとずいて自己の大学の歴史を位置づける、という視点も認められる。叙述の対象、分析の視点と方法、執筆の体制、刊行のスタイルなどといった点で、あたらしい傾向がみられるのである。<sup>(8)</sup>

### (三)

大学史一般の研究であれ個別大学史研究であれ、近年の大学史には以上のような顕著な傾向が認められるが、具体的な分析内容をみると、これについても次のようなあたらしい特色がみられる。

第一に、大学史の研究は、「ここ三〇年の間に、本格的な歴史分析の一大領域となっている」が、そのさい、エリート<sup>(9)</sup>の養成という従来の機能のほかに、社会移動、女性の歴史と大きなかわりがあるとみなされ、これらの研究がおこなわれるようになったことがあげられる。大学は一九世紀の後半期になると、世俗的な職業教育、勤労者への成人教育、女子のための高等教育というあたらしい任務をになうことになっただけに、これらが考察の対象になった。前出のL・ストーン編著『社会のなかの大学 (The University in Society)』のほかに、下記の著作がとくに注目される。

① C. Dyhouse, *No Distinction of Sex ? Women in British Universities 1870-1939*. UCL Press, London, 1995.

② R. D. Anderson, *Universities and Elites in Britain since 1800*. Macmillan, Hampshire, 1992 : Cambridge U. P., N. Y., 1995.

第二に、第一点とも関連があるが、大学内だけでなく、大学の構外に対してもますます関心がむけられるようになり、大学が置かれている都市ないし地域との関連性に一段と目が向けられるようになった。

- ① T. Bender ed., *The University and the City : From Medieval Origins to the Present*. Oxford U. P., Oxford, 1988.
- ② R. C. Whiting ed., *Oxford : Studies in the History of a University Town since 1800*. Manchester U. P., Manchester, 1993.
- ひいては、下記に示すように、その国の歴史、国家建設の歴史のなかに確かに位置づけられることとなった。
- ① M. Sanderson, *The Universities and British Industry, 1850-1970*. Routledge and Kegan Paul, London, 1972.
- ② do., 'The English Civic Universities and the "Industrial Spirit", 1870-1914', *Historical Research*, 61 (1988).
- ③ do., *Education and Economic Decline in Britain, 1870 to the 1990s*. Cambridge U. P., Cambridge, 1999.
- ④ M. J. Wiener, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit, 1850-1980*. Cambridge U. P., Cambridge, 1980 : Penguin, Harmondsworth, 1985.

- ⑤ H. Perkin, *The Rise of Professional Society : England since 1880*. Routledge, London, 1989.
- ⑥ R. Softer, 'The Modern University and National Values 1850-1930', *Historical Research*, 60 (1987).  
第三に「他の大学、他の国との比較のなかで考察されることが顕著になったことが注目される。大学史は総合的で比較的な (general and comparative) 研究となり、また全国的・国際的なパターンと関連づける傾向がみられるようになったのである。左記に示すとおりである。」
- ① P. Searby, *A History of the University of Cambridge*, vol. 3, 1750-1870. Cambridge U. P., Cambridge, 1997.
- ② A. J. Engel, *From Clergyman to Don : The Rise of the Academic Profession in Nineteenth-Century Oxford*. Clarendon, Oxford, 1983.
- ③ B. Harrison, ed., *The History of the University of Oxford*, vol. 8, The Twentieth Century. Clarendon, Oxford, 1994.
- ④ N. B. Harte, *The University of London 1836-1986 : an Illustrated History*. Athlone, London, 1986.
- ⑤ S. Rothblatt, *The Revolution of the Dons : Cambridge and Society in Victorian England*. Farber and Faber, London, 1968. [編註]
- ⑥ J. G. Williams, *The University College of North Wales : Foundations 1884-1927*. University of Wales Press, Cardiff, 1985.
- ⑦ K. H. Jarausch ed., *The Transformation of Higher Learning, 1860-1930 : expansion, diversification, social opening and professionalization in England, Germany, Russia and the United States*. Klett-Cotta,

Stuttgart, 1982.

⑧ F. K. Ringer, 'The Education of Elites in Modern Europe', *History of Education Quarterly*, 18 (1978).

⑨ S. Rothblatt, *The Modern University and its Discontents: The Fate of Newman's Legacies in Britain and America*. Cambridge U. P., Cambridge, 1997.

## 2 大学史研究の書誌的考察

### (一)

近年の大学史研究には、およそ以上のような動向と特色がみられる。けれども、その実相は種々様々である。叙述の対象であれ、研究の視点と方法であれ、執筆の体制であれ、実にさまざまなのである。個別大学史についても大学史一般についても、その歴史像は錯そうしているといつてよい。本稿で紹介するロウスブラット論文こそ、そのような多彩な諸相を具体的に指摘したところが出色である。

このロウスブラット論文は、先に記したように、『オックスフォード教育学評論』の「大学史を執筆する」という特集号（一九九七年六月）に所収された一編である。同誌には、ロウスブラット論文を含めて、大学史にかかわる下記の原著論文三編と、書評論文一〇編が収録されている。

① S. Rothblatt, 'The Writing of University History at the End of Another Century'.

② E. Glaser, 'Emancipation or Marginalisation: new research on women students in the German-speaking world'.

③ A. Gaukroger & L. Schwartz, 'A University and its Region: student recruitment to Birmingham 1945-75'.



最初のロウスブラット論文は、後述するように、とても幅広い研究文献（おもに英語文献）について書誌的考察を試み、近年の大学史研究にみられる「雑多で学際的な性格」を指摘している。第二論文は、ドイツ語文化圏における女子学生の諸経験をとりあげた研究文献をめぐって、比較考察をしている。第三論文は、バーミンガム大学に関する、データベースを用いた学生集団のプロソポグラフィカルな分析である。

書評論文の部では、中世ヨーロッパ諸大学の比較史、一六世紀のオックスフォード大学の歴史、一九六八年の学生反乱までのパリ大学の歴史、アバディーン大学の創立五〇〇年史研究叢書、近代ケンブリッジ大学と政治の関連、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス一〇〇年史、二〇世紀のオックスフォード大学、オックスフォード大学サマヴィル・カレッジにおける女子教育、第二次世界大戦前の英国諸大学における女子学生、一八五〇年以降のオックスフォード大学における成人教育、といったテーマをめぐる著作について論評されている。ただし、単なる内容紹介と書評という域をこえて、大学史の研究と執筆のスタイルおよび方法、守備範囲についても論及されている点が注目される。たとえば、当該機関の関係者だけでなく、一般読者や幅広い研究関心をもった歴史学者や社会学者などにまで至る、実にさまざまな読者層に対応した大学史のあり方、歴史研究のなかで近代大学のアイデンティティを考究する方法、一人で全体を担当するか複数が協力して書くかという大学史を執筆する体制のあり方、などをめぐる論議である。

## (二)

本稿で紹介するロウスブラット論文は、章節の区分は示されていないが、大きく三部に分けることができる。大学史研究の基本的な性格と特色、多彩で学際的な大学史研究、今後に期待される検討課題、という二部構成である。

その主要内容と特色をあげるとすると、次の諸点が重要であろう。

第一は、大学史研究文献についてとても幅広く書誌的な考察を試み、近年の大学史研究には「雑多で学際的な性格 (multifarious and interdisciplinary nature)<sup>(10)</sup>」がみられることを指摘した点である。具体的には、「一八〇〇年以降の歴史」をあつかった数々の研究成果、とりわけ英語文献を対象にして、おおまかな動向を整理している。文末には主要目録として九〇点の文献が掲げられている。

第二に、大学史研究といっても、個別大学史研究だけでなく大学史一般の研究をも、そのなかでもとくに大学史一般の研究を考察の対象にしている。そのさい、学校教育史と対比しながら、しかも歴史学研究の動向と対照しながら大学史研究の基本的性格を検討し、「雑多で学際的」という研究の特色を指摘している。

まず、大学史の基本的な性格と特色としては、次のような点が指摘されている。①教育史研究では、大学史よりも学校教育史への関心が強い。②大学における一般教育の歴史的意味については、さまざまな見解がある。③二〇世紀は「大学改革の世紀」であり、大学はものすごい勢いで変ぼうした。④一九九〇年代は大学史研究における「折衷主義」の進展が特色であり、大学史への関心の広まりがみられる。⑤中世および近代初期の大学史を専攻する研究者が一番多い。⑥大学史では、例外が多すぎ、人物の活躍も複雑すぎるし、大学と社会との多方面にわたる関係があまりにも錯そうしているから、「今日、大学を一般化するのには危険をはらんだ大仕事」となる。⑦大学史の普通の形式は「一大学の事歴を中心にした総合的な歴史」研究である、などといった諸点である。

次に、「雑多で学際的な」研究というのは下記のような諸事項にかかわる研究であり、それぞれについて具体的な事例が示されている。①一大学の事歴を中心にした学校史、②大学史上の人物、③大学人の自伝、④大学と物理科学との結びつき、⑤大学の社会史研究、⑥研究大学、⑦学問の専門職化、⑧大学における歴史学、⑨学問分野の研

究、⑩国・大学・専門職の関係、⑪専門職と大学との関係、⑫思想史との相互浸透、⑬大学教育の目的、⑭J・H・C・ニューマン研究、⑮大学と国家の関係、⑯学問の自由、⑰政府による大学改革、⑱キャンパス・プランニング、⑲校舎建築と施設設備、⑳一九世紀における大学の世俗化の進展、㉑大学と都市との関係、㉒学生の競技やスポーツ、㉓アメリカの中等教育と大学教育、㉔アメリカ高等教育の変化と新設大学 of 精神文化、㉕知識の獲得と近代大学の組織、㉖慈善団体による大学への支援、㉗ビジネス教育、㉘大学の一般教育と中等学校における普通教育との関係。

第三に、これまでの研究の成果と動向についてたんねんに検討を加えたうえに、検討されるべき今後の課題として、以下の諸点を指摘した。残された課題というより、考察を深めるべき項目といったほうがよいであろう。①「大学の学内生活の歴史や学生生活と大学教師の文化」。②「大学の組織と管理面・リーダーシップと運営の構造、政府と官僚および大学理事会と学部のある相互関係、教員文化や学生文化の生成と多様性といった諸側面」。③「大学の活動の基礎単位である学部や学科」の歴史。④「入学、入学の形態、学生募集の歴史」。⑤大学理事会。⑥大学の経済的な貢献。⑦「学生のサブカルチャー、地域や国によるその違いや時のたつにつれて起こる変化に関する研究」。⑧「学生のさまざまな体験、世代形成における教育の役割、次々起こる種々の変化、こうしたことが大学の教師や理事にもたらす問題点」、とくに大学教師の役割をめぐる考察、などである。

第四に、本論文は一八〇〇年以降の近代大学の歴史像をめぐる書誌的な考察をすすめているけれども、歴史的な全体像を見通すための概念装置は考えられていない。しかも、動向を理解する捷径である時期区分についても、明示されていないという点を指摘しなければならないであろう。大学史研究が個別化・細分化され、通史的なものから問題史的なものへと向かう傾向がみられることは研究の次元を高めることになるけれども、全体を見通すことが

いよいよむつかしくなるだけに、近代大学史の全体像の構築につながる時期区分と概念装置を示すことが求めらるであろう。

また、大学史の研究と執筆の高まりがみられたのには、その前提条件として、素材となる原典史料（創設文書や学則類、学生や教職員の諸記録、校舎・付属施設・校地にかかわる資料など）の収集・整理と編纂作業の進展があったはずである。本論文では、そうした基本史料の蓄積に対する関心が欠如している。大学史の研究と執筆の動向というなら、そうした資史料をめぐる成果と動向についても論及すべきであったであろう。

## (二)

本論文の著者シェルドン・ロウスブラット (Sheldon Rothblatt) は、現在カリフォルニア大学バークレイ校歴史学科の教授職にある。同校の高等教育研究センター長を務めたこともある。現在は、『タイムズ高等教育サプリメント (The Times Higher Education Supplement)』紙のコラムニストであり、また英国教育史学会の機関誌『教育史 (History of Education)』の編集委員でもある。主著として、古くは『ヴィクトリア朝ケンブリッジ大学教師たちの大改革』(一九六八) や『イングランドの一般教養教育の伝統と変容』(一九七六) が、また近刊として『近代大学がかかえる諸問題、英米におけるニューマンの遺産の行方』(一九九七) と題する著作などがある。<sup>[1]</sup> このほど、『教養教育の系譜』と題する訳書も刊行されている。一九八五年から一九九五年までに著わせた六本の論考をもとに編まれた訳書であって、アメリカにおける教養教育(リベラル・エデュケーション)の「歴史的変遷とその構造的特質」について考察している。<sup>[2]</sup>

本論文の原題は「二〇世紀末における大学史の執筆」であるが、その内容にかんがみ、本稿では表記のような題

名に変更して紹介した。また、訳文中の一から三までの小節区分ならびに見出しは原文になく、訳者が便宜上あたらしく設けた。翻訳紹介にさいし、とくに松村好浩先生（姫路独協大学）、宮田学先生（名古屋市立大学）から種々ご教示をいただいた。ここに記して多謝する。

最後に、本論文は、先記のように、『オックスフォード教育学評論（*Oxford Review of Education*）』の二三巻二二号（一九九七年六月）に所載された<sup>(13)</sup>。同誌ならびに著者ロウスブラット教授からの許可をえて、ここに紹介するものである。

## 注

- (1) J. Howarth ed., 'Special Issue: Writing University History', *Oxford Review of Education*, Vol 23, No. 2 (June 1997)
- (2) D. Greenstein, 'University History: Recent Contributions from Scotland', *ibid.*, p. 223.
- (3) J. Howarth, 'Introduction', *ibid.*, p. 147.
- (4) *Ibid.*, pp. 147-148.
- (5) D. Greenstein, *op. cit.*, p. 224.
- (6) 早島暎「新しい国際雑誌『大学史研究』の創刊」『大学史研究』一二号（一九九八）六一―六七頁、参照。
- (7) D. Greenstein, *op. cit.*, p. 223.
- (8) 拙稿「英国における大学史研究」『名古屋大学史紀要』第七号（一九九九年三月）六五―九六頁参照。本節は、この拙稿と少し重複するところがある。
- (9) M. Moss, J. F. Munro, R. H. Trainor, *University, City and State: The University of Glasgow since 1870*. Edinburgh U. P., 2000, p. 2. 以下に指摘する分析内容面における特長三点については、同書（Introduction, *ibid.*, pp. 1-12）を参照した。別

府昭郎「ドイツにおける個別大学史叙述の歴史的変遷」『明治大学史紀要』九（一九九一）一一一八頁も参照（同論文は、加筆修正されて、寺崎昌男ほか編著『大学史をつくる——沿革史編纂必携』東信堂、一九九九、七九—一〇一頁に再録）。

(10) J. Howarth, 'Introduction', *op. cit.*, p. 148

(11) S. Rothblatt, *The Revolution of the Dons : Cambridge and Society in Victorian England*. Faber and Faber, London, 1968, *op. cit.*; do., *Tradition and Change in England Liberal Education : An Essay in History and Culture*. Faber and Faber, London, 1976; do., *The Modern University and its Discontents, The Fate of Newman's Legacies in Britain and America*. Cambridge U. P. Cambridge, 1997, *op. cit.*

(12) S・ロスブラット<sup>ロズブラット</sup>（吉田文・杉谷祐美子訳）『教養教育の系譜、アメリカ高等教育にみる、専門主義との葛藤』玉川大学出版部、一九九九、一二三九頁。

(13) Sheldon Rothblatt, 'The Writing of University History at the End of Another Century', *Oxford Review of Education*, Vol. 23, No. 2 (June 1997) pp. 151-167.

## 一一 ロウスブラット論文「近代大学史の研究と執筆」（翻訳）

### 1 大学史研究の基本的性格と特色

大学の歴史をめぐる著作はあまりに大量かつ多面的であるので、この種の書誌的論文では少しの主題や動向に触れることしかできない。『十二夜』のマルヴォーリオが言ったように、真昼の草原のような明るくてよく見わたせるところだって、そんなに多くは見つけだすことはできない。それに、概観しようとしても、論評者が一番よく知っ

ている分野をどうしても強調してしまう。だから、以下に述べるのは筆者個人の好みで選んだものであり、一八〇〇年以降の歴史を扱った著作にしばられている。正直いって、重大な脱落も避けられないであろう。

これまで大学史は特定の専門分野になっていなかった。すなわち、焦点が定まりにくく、一つの専門分野にとどまるかどうか疑わしいまだ独立した分野になっていない。これは、たぶん数多くの歴史の特殊研究についてもいえることであろうが、どの歴史の特殊研究もいつまでも境界域にとどまりえないし、いずれも結びつく学問や関連する学問を自由に選んで結びついていくのである。しかし、いつかはかならず、まだ独立していない多くの分野ははっきりと制度化されて、いろいろな学部や教育課程のなかの正規の教育科目になる。労働史、女性史やマイノリティ・グループの歴史、都市史、美術・建築史はいずれも専門分野として独自の地位を獲得してきている。生態学の歴史も、同じようにしかるべき位置を見つけはじめている。国によっては、歴史家の関心を主に引きつけるのは、初等・中等教育のほうである。というのも、とくに英国やアメリカ合衆国では、歴史家はいつも教員養成大学や教育学部（ただし、歴史学科との兼任という場合もあるが）に配置されていたからである。アメリカ合衆国の場合、教育学部は労働市場や家庭内の構造的な問題から派生する、さまざまな社会悪を正す解決の鍵を持っていると、長いあいだみなされてきた（今ではほとんど絶望的であるが）。実社会とかかわる経験が強調されるのもうなずける。ヨーロッパ大陸では、教育史研究者は教員養成がおこなわれない「教育学部」か、教員養成を「科学」の一部門であると考えするような「教育学部」に、しばしば配属される。その結果、高等教育も含んだ教育の歴史は、思想史を執筆する方向にむかう傾向が強いことになる。<sup>(1)</sup>

英語圏における教育史の主要な学術誌二誌にぎつと目を通してみると、一般的な傾向がつかめる。一九八九年から一九九六年末までに、英国で編集されている雑誌『教育史 (History of Education)』は約三七本の論文を掲載し

たが、そのうち、高等教育史に関連する主題をとりあげているのは七本ぐらいである。これと同じ期間に、同誌に相当するアメリカの『季刊教育史 (The History of Education Quarterly)』には約八七本の論文が載ったが、そのうち、大学の歴史もしくは大学に関連した歴史を扱ったのは二〇パーセントほどであった。書評もまた、学校教育のほうにおおいに傾いている。編集の行き届いたこの二誌を批判するつもりなどなく、教育の歴史を記述する精力の多くがどこに向けられているかを示したまでのことである。もちろん学校教育史上のさまざまな問題は、大学史上の研究主題とも関連しており、とりわけ入学基準、カリキュラム、成績、大学生(あるいは大学生に相当する者)の文化に関しては、関連性がある。

このような視点から見ると、大学史は制度的にはっきりと位置づけられていないところがある。大学史は今まで自立していなかった。つまり、大学史を実際に教えてきた人たちは、いつも実に多くの学部や教育課程のなかに、その研究基盤を置いているのである。こうした状況には長所がいくつかある。すなわち、この分野は、ある一つの「学派」に時おり支配されるだけなのである。したがって、どんな研究であれ排除も無視もされることはないし、また、歴史家は、方法論上や歴史記述上の示唆を与えてくれる資料だったところからでも望みどおりに引用できる状態になっている。しかしながら、短所が少なくとも一つはある。大学史研究者は、拘束がないし自分たちと関係のあるものが密接に結びついているので、自分の研究を、とくに比較研究してみるには困難があるし、かつまた、政策や制度面での連携の変化、文化の変容、諸改革の始まりに関する、白熱した論争に発展するようなテーマに出あうことは、むづかしいのである。少なくとも目下のところ、三〇年ほど前に注目を集めたのと同じような論議は、見あたらないようである。たとえば、マルクス主義者のな解釈であるとか、ジョージ・エルダー・デイビス(George Elder Davies)が生き返らせた一九世紀初期のイングラント・スコットランド論争とか、アメリカの「植民地大学」



の歴史をめぐる応酬とか、フリッツ・リング (Fritz Ringer) の保守的な論文 (これは、一九世紀ドイツ史の別のいろいろな解釈と同様に、論争の文字どおりの火付け役となった) とかが、それである。<sup>(2)</sup> 初等・中等教育史上には、イングランドのパブリック・スクールの研究、あるいはアメリカ合衆国における教育と民主主義に関する故ロレンス・クリーミン (Lawrence Cremen) の見解、現在も続いている知能テストをめぐる論争、あるいは——別の種類の論議であるが——女性や少数民族、宗教における少数派の排除の歴史などが通常ひき起こす意見の対立がみられるが、大学史においてはこれに相当するような対立を捜し出すことはむづかしいのである。ここに高等教育史研究者が参入する余地は、<sup>(3)</sup> おおいにある。

大学や国を問わず、一般教育 (liberal education) の歴史的意味をめぐる見解の違いがいくらかみられる。とくにアメリカ合衆国に関していうと、輪郭のはっきりした全国的にみたらエリートむけの中等学校教育がないがゆえに、見解の違いがみられる。普通教育 (general education) は、それゆえにいわゆる「高等」教育に向上したのだった (この経緯は現在のヨーロッパの地域によっては起こりつつあるかもしれない)。しかし、見解の相違がいろいろみられるとはいえ、ディーネス・デソウザ (Dinesh D'Souza)、ウィリアム・ベネット (William Bennett)、故アラン・ブルーム (Allan Bloom) のような、今日のアメリカの論客たちがみせる激しさや怒った反応ぶりに匹敵するものはない。かれらは、アメリカの大学教師を、粗雑で安上りのカリキュラムと政治的な傾向があるという理由で、嘲笑したのだった。

とはいっても、今や大学変革の世紀は終ろうとしている。この一世紀はヨーロッパの歴史上もつともすばらしい時期であって、大学変革の世紀と名づけられ、しかもはるかに多くの人びとに影響を与えうるほどの時期であった。ヨーロッパは、第二次世界大戦の痛手から復興して以来、エリート型高等教育からマス型高等教育に移行し、入学

や学位やディプロマの要件を改革し、大学セクターと非大学セクター間の関係を修正し、ヨーロッパ学生交換プログラム、オープン・ユニヴァーシティ、それに市場に対応した高等教育を生みだしてきている。息をのむような、ものすごい速さでさまざまな変化が起こっており、どんな結末になるのか今のところまったく見えていない。財政援助について再検討されてきたし、また基礎教科と応用教科の区分はおおいに混乱をきたしたし、しかも、ひとたび全体主義国家が打ち倒されたときには大学の想像以上に多くの使命を政府当局が責任をもって引き受けてきたのだった。こうした変化にイデオロギー的な側面はなかったとしても、見解の違いはおびただしかったことであろう。しかし、イデオロギーは、左派も右派も、それ自身がこうした変革の歴史に欠くことのできないものであった。歴史家が自分の政治的な見方を自分だけにとどめておくことはめったにないから、次の世紀には活発な動きがきつとおこるであろうと思われる。

しかし、今までのところ、一九九〇年代は折衷主義の進展がみられたことが特色であり、国民史と国家的関心事の方向に（たいていの歴史的記述がそうであるように）強く向かうのも無理からぬことである。こうした分野に対応するために毎年発行されている「大誌」、『大学の歴史 (History of Universities)』と『高等教育史年報 (History of Higher Education Annual)』には関心の広がりが見られる。前誌においては、ドイツ宗教改革におけるスコラ哲学、一五世紀ルーヴァンにおける市民と大学側の関係、中世のサラマンカ大学の学生たち、近代英国における大学とエリート、一八八四年以後のグラーツ大学におけるスロベニア地方出身の学生たち、一九世紀末のサウス・ケンジントンにおける大学建築と科学教育、などをめぐる論文が掲載されてきた。後者の『高等教育史年報』からえり抜かれた出版物には、具体的な機関の歴史、たとえば近代初期のパドゥア大学の歴史や、一九二〇年代以降にみられるニューヨークの「都市型大学」へのユダヤ系移民子女の入学、イスラエルの二大科学技術大学の一つでハイ

フアにあるテクニオン、ここ三〇年間イリノイ州にみられた公立大学の集中と分散、中国人研究者と近代的大学、一九世紀末のアメリカ合衆国における多目的カレッジに関する論文が、載せられている。

大学史研究者のなかで一番数の多いグループは、中世ないし近代初期を専門とする人たちであり、かれらの著作は「教育学」の専門誌でない、非常に多くの雑誌に掲載されている。概して、これらの研究者は、自分を大学史研究者というよりは中世ないし近代初期の歴史学者とみなしており（現代主義の学者も同様ではあるが）、かれらの著作は、中世ないし近代初期の文明とそれを支援した諸々の機構に、とりわけ知的専門職、科学と学問、教会支配と王政に対して大学がいかに貢献したかについて、詳述している。

共通言語、統一された教会、教育や学問の目的に関する基本的な前提をもとにした中世文明が統一性をもっていと想定されたその事實は、今や歴史家による詳細な吟味によってほとんど消失している。かれら歴史家は、政治や教会の違いがかなり大きいので、「中世文明」なるものを規定しようとするどんな努力も慎重に修正されるべきであることを明らかにした。文書にもとづくあらたな情報だけでなく、証拠資料を考究するあたらしい方法（大部分は現在の社会的・政治的な価値変化の影響による）もあらわれたので、大学の特質と位置を要約するという課題は、以前と比較にならないほどいつそうむつかしくなっている。大学の中世ないし近代初期の歴史がこのような事情であるなら、もっと最近の大学を研究するには、膨大な数えきれないほどの資料からわれわれはどんな結論を引き出すことができるというのであろうか。大学は学生数や財源が肥大し、あたらしい地方や地域へ進出し、使命や任務が増大し、国内生産物のかなりの部分を消費し、しかも、とくに科学技術や、軍事教育・一般教育・職業教育・専門教育を遂行する能力に関しては、国の歴史のなかで中心的な位置をしめるので、文書や統計や情報がとめどなく提供されてきている。今日、大学について一般化するのには、危険をはらんだ大仕事である。特異な点があまりにも

大きく、例外があまりにも多いので、一つの項目に納めきれないし、個々の人物の働きも複雑しすぎて要約などできないのである。また、大学と社会との多方面にわたる関係があまりにも錯そうしているので、適切な定義づけをするのを許さないほどである。そのうえ、大学は今では「高等教育制度」の一部として語られるので、大学にかかわるどんな結論も、国によっては大学と呼ばれたことはなくても今日の基準では省略することができないものをも、含めなくてはならないのである。

## 2 多彩で学際的な大学史研究

このようなわけで、大学史という分野の境界がはっきりと確定されず、しかも、学部生や大学院生を教えるためのポストがほとんど割り当てられないとしても（セミナーや専門的な論文は必要なきに用意されるにしても）、何世紀にもわたる大学の進展ぶりを集中的にとりあげるかまたは簡単に触れる研究は、やはり数多くみられる。大学（あるいは高等教育制度）は、あたらしいテクノロジー、あたらし経営能力、組織理論を生みだすものとして、また、（いわゆる「英国式」の実際に執筆し研究している人が支配的な国は別であるが）多くの国では、たいていの専門職者を養成する拠点として、ハイテク経済や都市社会に対してきわめて重要な位置を占めているのであるが、このことが、大学史の執筆に対して小さいながらも効果的な刺激を与えてきたと、あえていってもいいであろう。ジュネーブで統轄されているヨーロッパ大学総長・副総長常置委員会（CRE）のプロジェクトや、具体的な大学を基盤とした種々のプロジェクト、たとえば、ヘブライ大学のプロジェクト、四巻から成るケンブリッジ大学史や八巻から成るオックスフォード大学史、（『教育史 *History of Education*』の前編集長であるスウォンジーのロイ・ロウ Roy Lowe が主要な役割を果たした）バーミンガム大学史、アバディーン大学史五〇〇周年記念研究、ボロー

ニア大学の大学史・科学史推進国際センター、などによって代表される総合的な歴史研究は、今日大学が重要であり卓越性があることからもたらされたところがいくぶんかはある。ただし、このようなプロジェクトにあてられる実際の財源はかなり限られている。そうしたなか、プラハのカレル大学事業の歴史は、とくに言及するに値する。これはみずからの運営組織と財源を持った独立した学科に置かれているという点で、ほとんど類例がないからである。

このような趨勢に名前をつけなければならぬとすれば、総合モデルとか協同モデルとかになるであろう。これは、大学史を執筆するには膨大な数の資料が用いられるし、一人の執筆者が一機関の歴史のすべての側面を網羅する記録を集めることなどできない、ということを反映している。しかし、このような総合的な歴史研究でさえ、一定のモデルという決まったものはない。オックスフォード大学史の方式——もっともよくみられる——は、個々のテーマに関する章を年代順に配列するという形式をとっている。ケンブリッジ大学の場合は各巻ごとに担当する一人の執筆者を任命したのだが、各巻は長い期間をとり扱っている。一方、CREプロジェクトにかかわっている執筆者はだれもが比較考察するよう求められているし、また、東西ヨーロッパのあらゆる大学との関連のなかで論題を展開させるという責務を負っている。実に手ごわい仕事なのである。

たいていの場合、大学史を執筆するさいの具体的な内容と主題の選択は、いろいろな歴史編纂の分野ですでに確立したテーマから生まれてくる。それは、(大学は社会的・経済的不平等を生みだす源だという古い時代の先入観にかわって)、今や富裕な人びとを生む源と国が思いこんでいることに影響されないとはいえない場合にかぎる。

どこの国でも大学史を執筆するごく普通の形式といえば、学校史 (house history) である。これは一大学の事歴を中心とした総合的な歴史であり、たいていは祝賀の意味あいがみられるが、例外もたくさんある。最近の優れた

事例の一つに、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの歴史をめぐってダーレンドーフ (Dahrendorf) 卿がなした記述 (本論文が所収されているこの巻にて論評されている) がある。これは、自分が直接関与して批判的に評価するという、これまでにない水準にまで大学史研究をもたらしているし、また同校にみられる学問研究への献身と都市問題解決への関与とのあいだの、歴史的な緊張関係を解明している。ロンドン大学に関するネグリ・ハート (Negley Harte) の著書は、目あたらしい情報や魅力的なイラストを提示しているので、学界の枠を越えてもっと幅広い一般の読書層にまで広まっている。フランクフルトのゲーテ大学についてノウトカ・ハンマスタイン (Notker Hammerstein) が著わした、九〇〇頁という厚冊にして威圧的な研究書 (さらに続刊の予定) は、一人の著者の手になる出版物としては例がないほど広範囲にわたっている (Dahrendorf, 1995。Hammerstein, 1989。Harte, 1986)。

大学史のなかには、一人の人物を中心に書かれる場合もあるし、多くの人物が続々登場している場合もある。そうした大学史はアメリカに典型的であって、たいていの場合、カレッジや大学の学長を中心にあげている。ノース・カロライナの丘陵地帯にあるブラック・マウンテン・カレッジについて、マーティン・デュバマン (Martin Duberman) が一九七二年になした記述は、短いが波乱に富んだ歴史であるだけに人文科学の多数の名士を引きつけたのだが、これは筆者の大好きな作品である。シカゴ大学のロバート・ハチンズ (Robert Hutchins) をめぐるメアリ・アン・デューバック (Mary Ann Dzuback) の研究書は、つい最近加わったばかりの秀作である。(アメリカ合衆国では、「学校史」研究で一番多いのはやはりシカゴ大学とハーバード大学である。[Duberman, 1972。Dzuback, 1991])。この部門の研究がアメリカで優勢であるのは、アメリカ高等教育の進展には、学長が英国やヨーロッパ大陸の学長よりも大きな影響力をもっていたという、明白な理由による。大学の慣例では、大学の運営権は

非聖職者から成る理事会の手にゆだねられている。その理事の選抜方法は、州やシステムによってかなりまちまちである。大学の長はこの理事会のメンバーであるか、または理事たちと協同して仕事をするかのどちらかである。アメリカ以外の国では、非聖職者から成る理事会は非力であり、しかも、その長はふつう交替制であったり（英国の副学長は最近まで交替制であった）、あるいは任期の限定されている学長が選ばれる。ヨーロッパ大陸では、大学教師はふつう公務員としての身分を付与されるので、アメリカの場合と同じ意味での「雇われ人」ではない。大学の拡充、財源、教授の任命、入学許可、任務方針に関しては、政府が確固とした統制権をもっている。この伝記部門に寄与した英国の最近の作品には、ロンドン大学の発展と医学とを関連づけながら考察した、ウィルソン (Wilson) の研究がある。(H・ヘイル・ベロト H. Hale Bellet が、ユニヴァシティ・カレッジの起源についての分析を研究の一部として以来このかた) 知られてきたことであるが、組織的な医学界の位置は、ロンドン大学のもっとも初期にあたるユニヴァシティ・カレッジの命運にとって不可欠なものであった。だが、ウィルソンは気をきかせて、一八五〇年代後半の医療改革につながる数十年間についても解明している (Wilson, 1995)。

学問史の重要な一部をなす大学史には、当然のことながら、さまざまな人物がひんばんに登場する。大学の研究職を生みだし、発見することを制度化し、大学を近代的な研究調査の時代に導いた男女の学者のことを考慮に入れなければ、古典の研究、近代的な語学教育の発展、数学史・心理学史・自然科学史、さらに、史学史自体までも考えられないことである。大学人の自伝は、歴史そのものというよりも歴史資料の分野に属するものではあるが、大学の内部史について理解を深めるものとして、本当は見落とすことはできないものである。というのも、とくに大学の内部史や、学生生活と大学教師の文化については、これまで驚くほど注目されてこなかったためである。オックスフォード大学のコーパス・クリステイ・カレッジが注目されているのは、かつての学長が一風変わった率直な

(したがって、たいへん「モダンな」) 自画像を書いたせいである。A・H・ハルゼー(A. H. Halsey)の最近出された自叙伝では、ロンドン、バーミンガム、オックスフォードで大学教師として過ごした生涯が語られている。<sup>(4)</sup>

実験科学の歴史をながめてみると、何世紀ものあいだ、たいていの国ではアカデミーやさまざまな政府援助機関の枠外に置かれていた(一つの例外は一八世紀のオランダである)物理科学が、大学のなかに正式に位置づけられるようになった。そうである以上、この物理科学と大学とのあらたな結びつきを大々的にあつかう歴史研究の出現を期待せずにはいられない。ジョン・ハイルブローン(John Heilbron)とロバート W・サイドル(Robert W. Seidel)は、粒子加速器と放射性同位元素の誕生の地であるカリフォルニア大学の構内にある、有名なローレンス・バークレイ研究所を取りあげた、数巻からなる本の第一巻を出版した。また、研究大学に関するロジャ・ガイガー(Roger Geiger)の研究は、テーマを広げて、多数の主要な研究大学でアメリカの戦後の科学がどのような役割を果たしたかについて、正確に描いている。<sup>(5)</sup>ハイルブローンによるマクス・プランク研究や、ナチス時代のドイツに生きるという不幸を被ったすべてのドイツ人科学者の生涯における、どうみても危険な一時期についての研究があることについても、ここで触れておかなくてはならない。<sup>(6)</sup>

(社会誌学的な)社会史研究においては、たとえば、ブライアン・サイモン(Brian Simon)のような社会民主主義的ないしマルクス主義的な著者によって代表されるような、変革をめぐる社会階級的解釈から、かつてハロルド・パーキン(Harold Perkin)が「忘れられたミドル・クラス」と呼んだもの、すなわち専門職へという、はっきりした変化がみられる。ヘイスティングズ・ラッシュドール(Hastings Rashdall)が一〇〇年前に示した(Rashdall, 1895)ように、大学の起源の点からみても創立当初の目的という点からみても、このような変化は理解できる。大学はこれまで専門職業意識ないしは最新の専門職を形成する、主要な勢力の一つであった——たいていの国では、



欠くことのできない機関であったからである。さらにまた、パーキンを引用していうと、知的専門職は他の専門職を養成するのであるから「もっとも重要な職業」なのである。専門職とは知識を基礎とした職である。その当時の文化にかかわる知識を基礎とした活動を文字どおりすべて包摂するという近代大学の帝国主義が、もっとも重要な一般教養科目ないし一般教育が衰退してしまつて以来の、大学史のきわだった特徴である。これは広大な研究主題であり、また補助的な学問、とりわけマクス・ウェーバー以後の社会学のいろいろな著作が用いておこなわれる研究領域の一つである。工学に関するロルフ・トースタンダール (Rolf Torstendahl) の著書だけでなく、学問の専門職化に関するかれの経験的・理論的な研究も、注目に値する。また、一九世紀以降の英国の大学における史学史をめぐる、リーバ・ソウファ (Reba Soffer) のかなり個性的な記述も、注目に値する (Soffer, 1993)。同く Soffer, 1994 も参照のこと。

大学史というよりむしろ学問の歴史を取りあげた諸研究は、これまた、いかに授業がおこなわれていたかを明らかにするものである (Collini, 1983)。本来は歴史研究ではない著作のなかにもいろいろな洞察と歴史的な資料が含まれることがあり、その一つに、国家と大学と専門職の関係をめぐる、マイクル・バリッジ (Michael Burrage) のおもしろそうな制度的研究をあげてよいであろう。このなかでは、付随的に、一般教育の歴史的な意義が簡単に触れられている (Burrage, 1993)。ドイツにおける専門職と国家、およびドイツ大学と普通教育をめぐるチャールズ・マクレランド (Charles McClelland) の著作は貴重であつて、同書は法律、医学、国家、公務員のあいだにみられる緊密な関係や、市場原理にもとづいた報酬とは別の地位評価の重要性について、解明している (McClelland, 1981, 1991)。

研究者と大学という主題が、今日、大学史研究のなかで強調されるべき重要な問題であるならば、大学史ではカ

リキュラムや研究組織といった大学の内部的特徴を地域社会の社会的・職業的な特徴に関連づけるのだから、大学文化といわゆる「知識人」と呼ばれる人種との関係に対して関心があることについても、一言触れておかなければならない。大学の歴史としてみた大学史に関していうと、たとえば、ヨーロッパ諸大学の歴史文献のなかでは、レズリー・ステイブン卿に関するノーエル・アナン(Noël Annan)の著述<sup>⑦</sup>に匹敵するような、この主題に対する関心は薄れているようである。もちろん知性史あるいは思想史という形で、文学者や大学人や科学者の社会・哲学思想の著作は増え続けているけれども、その他の分野に属する思想家と称する人たちと比べて知識人とはという定義づけをめぐって論争がいつもある。しかしながら、大学史と思想史の相互浸透は、大学教育の目的をめぐる論議という形をとって注目され続けており、ここでは、その例として、スウェーデンとドイツについてはスヴェンエイリク・リードマン(Sven-Eric Liedman)の、英国に関してはマーサ・ガーランド(Martha Garland)の、アメリカに関してはブルース・キンブル(Bruce Kimball)の著作を、それぞれあげることができよう(Kimball, 1995; Liedman, 1993; Garland, 1980)。

ここで、あのジョン・ヘンリ・カーディナル・ニューマン研究に一言しておくのがよからう。このヴィクトリア女王時代の著名人についての分析はなお根強くつづいており、ニューマンは英語圏にある大学の意義をめぐる著作に対して、無意識のうちに影響を与え続けている(フランス人の注目も少しばかり引いている)。ニューマンは、大学の機能の変化に関心を持った歴史家のみならず、神学者、文芸批評家、思想史家や宗教史家によっても調べられている。この大学に関心をもった歴史家たちにとってはニューマンの『大学の理念(Idea of a University)』こそが主要な典拠であって、大学と大学生活はエッセンシャルリズム思想によって活気づけられるという仮説にたっている。ニューマンにとって、その根本的な考えは教えること、すなわち、かれの言葉でいえば、知識の普及であった。

が、しかし数名の注釈者は、聖職者の祝福を与えるために、ニューマンの言葉をざん新な研究と専門教育という現代的な使命に活用しようとして、知識そのものが目的であるというニューマンの見解から自分なりの手本をつかんでいる。幾人もの英国人編者のもとで計画された大がかりな『書簡と日記集 (Letters and Diaries)』の構想は、これまで何冊もの本を生みだしてきたが、しかし、ニューマンの今日的妥当性をめぐってごく最近あらわれたいくつかの解釈が、アメリカの学者たちによって企てられてきたこともまた、興味深いことである。実のところ、これまでいつも関心が強かったのは大西洋の西側のほうであった。非聖職者による大学の「所有」は、財団の役員、行政官、大学人、経済界、政治家たち（かれらは非聖職者たちの理事会で代表されている人たちである）のあいだで、歴史的にみて管理支配をめぐる抗争を引き起こしてきている。その結果、大学の意義と目的を規定することが、どちらのグループが実際の権限をもっているかだけでなく、もつとも正統なモラルの持ち主であるかを決める、ということもよい。クラーク・カーは、一九六〇年代初期にハーバード大学でおこなった、将来的に大きな影響力をもつガドキン講座で、評価の基準としてニューマンを用いたのだった。イエール大学はそのニューマンの現代における妥当性についてとくに関心を持ってきたし、また、イエール大学出版会もかれの論題に関連する最近作二点を出版することができた。著名な神学史家であるヤーロースラフ・ペリカン (Jaroslav Pelikan) は、『大学の理想、再検討 (The Idea of a University: A Reexamination. New Haven: Yale University Press, 1992)』を著わしたし、また、ヴィクトリア朝イングランドにおける科学と宗教の関係を専門とする思想史家フランク・M・ターナー (Frank M. Turner) は、『ニューマンとこれから何とか生まれんとしているわれわれが構想中のサイバースペース大学とを対比させた論文集を一冊、編集したのである。<sup>(6)</sup>』

歴史家たち、とりわけヨーロッパの大学を研究主題とする歴史家たちがいつも関心をもってきたのは、永年の関

心的であった、ある関係に対してである。その関係とは、大学と国家とのあいだで続いている関係である。もちろん、アメリカ大学史の研究者も、公立大学制度（ここには学生の八〇パーセントが在籍している）の財源の大部分は州と連邦政府から調達されるので、この問題に関心をもっている。しかし、アメリカ人にとって問題となりがちであるのは自立と大学自治ということであり、したがって、政府と州との関係をめぐる研究はしばしば学問の自由の問題としてとらえられる。<sup>(9)</sup>アメリカ人は、州が消極的であるときは大学に最善になるよう行動し、州が活発でその意向をはっきりさせているときは危険であると信じている。

近代のヨーロッパ諸大学の学内生活に国家が介入することへの危ぐは、今世紀に全体主義的な政府が大学に入りこんださいに認められることはいうまでもないが、教授たちは無力なそれもしぶしぶ協力した者であったからといって許されるものではない。ドイツ人の擁護者や沈黙を守った共犯者がはたした役割に、おおいに注目がむけられ論議されてきている——たいていマーティン・ハイデッガーの名前があらわれる——が、そういう不幸で深刻な時期を異常とみなし、そうでない時期の国家と大学の関係を「正常」と（あるいはおそらく普通とまで）みなす傾向が、ヨーロッパの歴史記述には残っている。そのような傾向は一九世紀の英国大学の主要な歴史記述に一貫してみられ、それは少なくとも一九世紀中期に政府の誘導で有名な諸改革が進められた前後のケンブリッジ大学について、D・A・ウィンスタンリー（D. A. Winstanley）がなした数々の研究にまでさかのぼる。昔の大学は偏狭で利己的で階級に支配されており、公式にも非公式にも英国国教会に属してその利害に敏感に反応したと、くり返しいわれてきた。国王の勅許状や布告の性格を考えると、国家のような外部機関のみが、改革によるか、あるいはまったくあたらしい機関の設立を認可するかによって、高等教育の独占状態を打破できたのであった。政府の役割に関するこのような肯定的でホイッグ的な見方は、二〇世紀のほぼ全期間をとおして存続してきている。歴史家たちは、

英国社会における市場の影響力の歴史を無視するとか、現在は消滅してしまった大学補助金委員会を好意的に評価することで、こうした見方をおおいに支持しようとしてきている。<sup>(10)</sup> しながら、歴史家たちはまだサッチャーの大改革に手をつけていないし、将来の歴史家たちはおそらく政府の大学政策を賞賛することにもっと慎重になるであろうと思われる。<sup>(11)</sup> スウェーデンにおける大学史の研究者や著述家たちは、かつては国家と大学の提携をおおむね有益であるとみなすことが多かったが、現在は、一九七〇年代以降の政府の打ちだす諸政策（社会民主的政策も保守的政策も）についてかつて以上に懸念をいだいている。とくに研究や学内の管理に悪影響をおよぼすからである（Elzinga, 1993, 参照）。

最近のさまざまな会議や論文、著作から判断すると、いま歴史研究で関心を集めて活発化している分野はキャンパス・プランニングであって、これには、教育、調査、研究と空間の使い方との関係だけでなく、教育目的にかなった建築や景観設計の歴史が含まれる。これまでキャンパス建設に関する著作が少なかったということはないが、この研究主題に関しては、教育と学習の歴史からよりも、美術史やデザインの観点から取り組まれてきている。いくつかの名著、たとえば不朽の価値をもった『ケンブリッジ大学の建築の歴史（*The Architectural History of the University of Cambridge*）』はこの部類に入るし、ハウアド・コウルヴィン（Howard Colvin）による『建設されなかったもうひとつのオックスフォード大学（*Unbuilt Oxford*）』という、興味深いが一貫性に欠けた本もやはり同じである（*New Haven and London, Yale University Press, 1983*）。しかし、アメリカにおけるキャンパスの伝統様式の起源と発展に関するポール・V・ターナー（Paul V. Turner）の研究は、大きなあたらしい進展を示すものである。同書はこの主題をめぐって一八世紀から現代までを一貫して追いかけて、教育問題と空間配置がどのように相互に関連しているかを示し、大学を田園や都市や郊外の価値観に結びつけている。ヘリン・ホロウィッツ（Helen

Horowitz)はこの方法をアメリカ合衆国の有名女子カレッジに用いて、創立者たちが女性にふさわしい高等教育をという構想を推進させるために、寄宿舎の内部設備をどのように使用するつもりであったかについて、説明している。ソーフィー・フォーガン(Sophie Forgan)は、一連の論文で、英国における実験室と科学博物館の出現について検討を加えてきている。彼女が論じているのは、これらの構造物がどうしてそのような形をとったのか、また、ある形態の科学が近代大学に参入するのを正当化するのに科学に特有のシンボルがどのように用いられたのか、ということについてであった。スヴェン・ヴィトマーム(Sven Widmalm)は、ウプサーラ大学の物理実験室が世紀の変わるころに創設されたときの、空間的な意味を分析している。<sup>(12)</sup>

西ヨーロッパであろうとアメリカであろうと、一九世紀の大学は世俗化が進んだ。宗教は必修カリキュラムの一部でなくなっただけでなく、宗教的な実践や道徳的な関心が倫理的ないし文化的な環境を用意することもなくなった。オックスフォード大学とケンブリッジ大学のカレッジでは(セルウィンとキープルという新設の二校を除いて)、礼拝へ出席することの重要性が一九世紀後半になるとかなり薄れたし、職業活動を規制する規定がいくつかあらわれたことに左右されて、神学は大学のカリキュラムのなかの単なる一部になったのだった。スコットランドでは、大学における長老主義ははじめのうちには比較的寛容であったけれども、やはり同じような推移がみられた。一八四二年の教会分裂は、ずっと以前からすでにあらわれていた傾向を加速したにすぎなかったのである。ロンドン大学や市民大学(civic universities)のようなあたらしいタイプの大学は、特定の宗派とは関わりをもたなかった。ドイツや、ドイツ的な大学文化が手本とされた国々では、聖書各書の文学的歴史的研究によって宗教的色彩が徐々に弱まってきた。

アメリカでも、同じような変化がおこった。公共施設への国庫補助は、ふつうは教会と国家との分離という原理

原則にもとづいておこなわれた（しかし、例外はあったようである）。その支配的な原則は多宗教の国家のなかでは意味をなしたのであり、そうした国ではローマカトリック教やユダヤ教のようないわゆる「正統派の」宗教にまでも影響を与えた、進歩の概念を含んだ自由なプロテスタンティズムという広い形式のものであった。高等教育の私立セクターでは、話はさらに興味深くドラマティックであった。というのも、この私立セクターではほとんどの大学は教会の創立になるか、あるいは教会がからんでいたからである。アメリカ合衆国におけるカレッジの主要な創立者は会衆派と長老派であり、かれらはニュー・イングランド式のリベラル・アーツ・カレッジをアメリカ大陸の中西部や西部のほうにまで広げたのだった。宗教教育や倫理的・宗教的献身の衰退（さらには、これに付随してみられる「確固とした不信心」の増大）を、造物主は道徳的な希薄化を嫌悪するといったエドマンド・バーク（Edmund Burke）の所見に文字どおりしたがって、配慮深くまた心配しながら、詳細に分析した新刊書が数冊刊行されている。もし人間関係や価値観に関する伝統的な考え方が放逐されるとなると、競争相手が大量に侵入してくる余地が残されるものだが、そうした競争相手のすべてがコミュニティやヒューマニティに一番の関心をもっているわけではない。ジョージ・マーズデン（George Marsden）は、編著だけでなく近刊の大著のなかでもこのような問題を探究しているし、かれの同僚でノートルダム大学のフィリップ・グリースン（Philip Gleason）は、アメリカ合衆国におけるローマカトリック教会の教育の運命について緻密な考察をおこなっている。<sup>13</sup>

### 3 大学史研究の検討課題

著者や出版物をとりあげたこの限られた概説では、一般に大学史の領域に入る研究についての手掛かりを提供できるとはすぎない。しかし、興味ある研究対象は非常にたくさんある。調べていくと、自然と高等教育に対する爆発

的な関心まで調べることになり、(マーティン・トロウ Martin Trow の有名な一連のことばを用いるなら)ほとんどの国は限られた少数のエリート型の大学教育から、開かれたマス型の高等教育へ移行した時代か、またはその方向に大いに移行する段階にある時代とはどのような時代か、ということをはっきり規定するものである。高等教育問題は、これからあたらしい展開をみせる今日の問題のなかの一つである。筆者はこれまでいろいろな言ってきたのに、歴史家がまるで高等教育問題を気にとめないとすれば驚くべきことである。というのも、同業組合意識がどれほど強くとも、あるいはもつと広範な社会の諸問題から遮断されていようと、ほんらい歴史家というのは結局は現在広く関心を持たれている問題に傾斜していくものだからである。したがって、大学と都市との関係をめぐる著作に言及しないのは、怠慢であろう。この関係は実に多くの局面でみられる当然の関係であるが、しかし、最近まで英国やアメリカ合衆国でも、ヨーロッパ大陸史のなかで積極的に考察されてきた(Bender, 1988、を参照)。また、学生の競技やスポーツに関する著作に言及しないのも怠慢となるであろう。これは、アメリカの大学にみられる特性として欠くことのできない顕著な点であり、また学生の競技は、イングランドのばあい、学校と大学を結びつける重要なものであった。<sup>(14)</sup>アメリカの中等教育と大学教育を扱ったジャーガン・ハーブスト(Jurgen Herbst)の著作は、いろいろな理由で注目値するが、なかでも、ドイツ大学史に関する専門的な知識をもっていたことで、アメリカとドイツ両国間の過去のつながりについて考察することができた、ということをおかなければならない(Herbst 1982, 1995, 1996)。アメリカ合衆国では、これまで高等教育が刷新するさい、慈善団体がたいへん有力な支援者であった。それどころか、慈善団体は海外の学校をも支援してきている。たとえば、ロックフェラー財団はロンドン・スクール・オブ・エコノミクス<sup>(15)</sup>の存続に欠くことができなかった。カーネギー財団に関するエリク・カンドリフ・ラーガマン(Ellen Condiffe Lagemann)の記述は、こうした特殊なアメリカ的機関を理解する



のに欠かすことのできない文献である (Lagemann, 1989)。それから、もう一つ、とくにビジネス・スクールの時代に、アメリカのビジネス教育が西ヨーロッパ三カ国におよぼした影響をめぐって考察した、ロバート M・ロック (Robert M. Locke) の型やぶりの研究を推薦したいと思う (Locke, 1989)。

過去四〇年間に高等教育が変容する速さは、実に驚ろくべきものがある。初等・中等教育の機構上の重大な変更との関連で、この高等教育の変ぼうぶりをながめれば、現在ではこれに大学がこれまで以上にはるかに深く絡みあってしまったから、なおさらのことである。歴史的に、カレッジや大学における一般教育 (liberal education) と中等学校における普通教育 (general education) との違いは、いつもそんなに大きいわけではなかった。なぜならば、学校とカレッジおよび大学は、言語・文学教育が重なり合っていることでつながっているのが普通であったからである。国や制度によってかなりの違いはあったが、一方から他方への移行はいつも困難であったわけではなかった。かつてあったようなつながりは今日の相互依存と同じではなく、近代の官僚主義的教育交付制度と新形式の大学資格付与とが進展したことで、現在ではおおいに規制されている (付言すると、これらの関係ないし関係の欠如については、歴史家はしばしば注目してはいるが、詳細に注意深く研究されてしかるべきであろう。この主題に関して、どの国の制度についてであれ優れた著作を筆者はまだ知らない)。

大学史を執筆する企ては実にいろいろあり、かなりの数にのぼる。よくできた著作があり、そこからは多くのことが学べるし吸収することができる。東ヨーロッパの諸大学を考察した著作が西側諸国にも入手しやすくなり、しかも検閲官や独裁者に妨害されることのない研究成果があらわれてくるにつれて、「大学」という名称でとっついて、このいろいろな形態をした機関に関するわれわれの知識は増してくるし、同時にまた、高等教育がどのように進展したかを理解するための総括的な枠組に、大学以外の諸制度の歴史も織りこむことのむつかしさもまた増大す

ることになる。しかし、この大学史の分野にすぐれた著作が含まれるならば、あたらしい世代の大学史研究者の興味を喚起するような主題、方法、時代に事欠くようなことはなくなる。古い世代がそうであったように、あたらしい世代もまた多くの政治学者、経済学者、社会学者、公共政策アナリストを隣接の研究領域に見出すであろうし、<sup>(15)</sup> 文芸評論家も、ごく最近はかつてほど多くはないけれども見つかるであろう (Carnochan, 1993. Carter, 1990. Robin, 1995)。

歴史記述には著述や分析の形式がいろいろみられる。それぞれの形態にはいずれも状況説明と解釈に長所と短所がみられる。また、いわゆる「文学的」(ここでは「美学的」)で物語風の形式がかならずしも優位にたっているとはいえないけれども、ある形式が優勢で他の形式を排除することになる心配はあまりない。でもやはり、大学と社会の今日の問題に関心をもった歴史学者ではない人たちはそれを読んで、教育 (Bildung) のような複雑で抽象的な哲学的概念をさらにもう一度詳しく調べている史的な専門書を読みたがるのがふつうである。かれらは現代の政策にかかわる争点を解明してくれる歴史的な説明のほうを好むが、歴史研究は広い範囲をあつかうものであっても、かならずしも現代的な問題に注意をむけるわけではない。大学の財源調達、一般公開、カリキュラムの妥当性、応用科学と社会科学、「民営化」と管理統制主義、成績評価、監査と査定、教員の雇用条件といった問題——これらは、今日多くの国の高等教育制度を激しく揺さぶっている問題である——を、歴史家は(とり扱うとしても)現在に興味のある研究者の関心をひくようなやり方では検討しないのがふつうである。他のいずれの研究分野でもそうだが、ほんらいこの歴史研究という研究分野自身が歴史記述のあり方を決定するし、しかも、社会科学の著作の特徴ある概念が大学史を再構成するのにとくに役立つかもしれないのに、それを取りいれる可能性はほんの少ししかないようである。筆者はデイヴィッド・リースマン (David Riesman) とその共同執筆者のような社会学者の著

作物のことを考えているのだが、アメリカの高等教育の変容と新設大学の精神文化に関するかれらの著書に匹敵するものは、歴史分野では少ない。バートン・クラーク (Burton Clark) のすぐれた著作集は、歴史家がこの仕事に時間的な広がりをつけ加えて(たやすい課題ではないことを認めなくてはならないが)、どのようにして国内の大学制度の研究を組織するかについての事例を与えている。そのうち、筆者がとくに選びたいのは、組織体はどのように機能し管理されているかについてきわめて複雑かつ精巧に考察した、今では古典となったイタリア大学制度研究と、アメリカの一握りのリベラル・アーツ・カレッジとその「存続」戦略をめぐる刺激的な研究である。その他の著作のなかでも、かれはマーティン・トロウ (Martin Trow) と同じように、知識の獲得がいかにして近代大学の組織と文化を決定したかについて説明している (Clark, 1977, 1992。Trow, 1974, 1975, 1991。Trow & Halsey, 1971。Trow & Rothblatt, 1992)。この社会学者は二人とも組織理論の教育を受けたし、文化すなわち価値体系とその機能の遂行にも関心をもっている。大学の組織と管理、リーダーシップと運営の構造、政府と官僚および大学理事会と学部(ヨーロッパの意味での)のあいだの相互関係、教員文化や学生文化の生成と多様性といった諸側面は、大学史の執筆においてはそれほど進展していない——ただし、実験室の歴史は例外として扱っていいであろう——し、たとえば、いろいろな研究分野の思想史ほどにはとうてい発展してはいない。といっても、この思想史さえもしばしば社会学的な広がり欠缺している。たとえば、研究活動の基本単位である学部と学科についての全体像を示す研究はなぜないのであろうか。学科は、過去はともかく、今日のたいていの大学制度にみられる本当に重大な特色であり、アメリカの大学ではもっとも重要な部分なのである。学科は授業と任用を事実上統制しているが、どのようにしてこのような地位を獲得するようになったのであろうか。<sup>16)</sup>

入学や入学の形態、それに学生募集の歴史についてはまだ系統だった研究はほとんどないし、英国大学の経済的

な貢献についても、マイクル・サンダスン (Michael Sanderson) の大変すばらしい著作をしのぐような研究はほとんどなく (Burke 1982, Sanderson 1972 を参照)。もっと研究が多くあれば、大学が過去に経営的に失敗したことを、おそらく政治家や評論家はそれほどうるさく批判することはなかろう (しかし、主題が複雑になればなるほど、「多忙をきわめる人たち」はうるさく言いたがるということは承知している)。大学が理事会を持っているような国の場合、一方に政治家が、他方には大学人である理事がいるが、その理事会のあいだにみられる錯綜した関係についての歴史研究も、みあたらない。<sup>(17)</sup> 学生のサブカルチャー、地域や国によるその違いや時のたつにつれておこる変化に関する調査研究は、一国の大学史のそこで触れられているし、また、学生たちが騒ぎたて反抗的であるときか、あるいは左派の政治傾向があるときに触れられるのが一般的である。この歴史は込み入っている。一九八〇年代の後半に、チェコスロバキアの共産党政府を打倒するのに学生たちが果たした役割をひそかに祝福して、プラハの一般道路の壁に手が彫られたことと、学生たちが反ユダヤ主義の嘘を広めたり、ユダヤ人に対して暴力行為を働いたりすることを強く望んだ、一九三〇年代のリトアニアのようなどころの右派の政治とを、対比することはできるであろう。しかし、学生のさまざまな体験、世代形成における教育の役割、次々起こるいろいろな変化、こうしたことが大学の教師や理事にもたらす問題点を関連づけた記述となると、めったにない。とくに教える活動は学ぶ立場の学習者によってかなり形づくられるものだけでも、大学教師の役割についての研究がこのような社会学的、人類学的、歴史的な事実を考慮に入れることなどめったにない。<sup>(18)</sup> 一定の社会科学、とくに青年心理学、認知心理学、口述および記述文化 (ここにはフランス的な「ものの考え方」の影響があきらかにある)、教育におけるシンボルの重要性といった領域の寄与に対して、より敏感であったのは、ある面で、学校教育の歴史的重要性を研究する学者のほうであった。<sup>(19)</sup>

要するに、おびただしい数の研究分野がある高等教育史には論文や著書をいろいろ見出すことができるのだが、歴史（歴史学者のJ・G・ドロイゼン [J. G. Droysen] がいうように、実体として存在するとすれば）は進行していくものである。待ち望まれている研究がまだまだいくらでもある。過去も未来も、進取の気性と創作力と活力のある研究者に完全に開かれている。ジョン・ミルトンのいう二人の罪人たちは、樂園を追われたのに、「世界はすべて眼前にある」ことに気づいたのだった。問題は「どこを休息の地として選ぶか」である。

## 注

(1) パリの国際協会 (International Association) のガイ・ニーヴ (Guy Neave) には、いつものように、その学識と該博な知識でもっておいに助けてもらっているが、バートン R・クラークとともに、『高等教育百科事典』(The Encyclopedia of Higher Education. Clark & Neave, 1992) の共同編集者であれば、当然のことである。同書は、すべての高等教育研究者にとってなくてはならない文献である。目下、改訂事業が進行中である。過去にアメリカ合衆国で資金援助を受けた各種教育研究プロジェクトの概要については、Lagemann (1996) の報告書を参照のこと。

(2) James C. Albisetti (1994) による概要を参照。

(3) ジェンダーの歴史は多数の研究者が取り組む大きな企画であって、著書が急増している。たとえば、Margaret Bryant, *The Unexpected Revolution: a study in the history of the education of women and girls in the nineteenth century* (London, Institute of Education, 1979) および Dyhouse (1995)。しかし、長い偏見の歴史を持ったヨーロッパ諸大学よりも寛大だと思われているアメリカの大学史のなかの、一九世紀以外の困惑する時期を探究している研究者もいる。排除と融合の様相は国によってまちまちである。アメリカ合衆国では、長らく知られてきたことに数々の重要な様相を盛りこんだ、あたらしい著作があらわれている。すなわち、文学や歴史学という「紳士的な」学問分野は、あたらしい分野ほどには寛容でなかったのである。Klingenstein (1993) 参照。Greenberg and Zenchelsky (1993) も参照のこと。同書では、差別的な学生入学方針が、公的支援を受けたキャ

ンパスと私的な支援を受けたキャンパスとの区別に関連づけられて考えている。

- (4) Dover (1994). Halsey (1996). 自治的な同業組合としてのアカデミーに関するハルゼーの研究は、Halsey (1996)にまとめられている。カリフォルニア大学バークレイ校のバンクロフト図書館による、野心的な口述記録プロジェクトに言及しておくべきであろう。これは、今日までに退職した教授に対する膨大な数のインタビューを文字化したものである。

- (5) Heilbron & Seidel (1989). Geiger (1986). つれに、Lindqvist (1993) への所収論文もつけ加えるべきであろう。

- (6) Heilbron (1986) 'および' もっと長いドイツ語版 (Heilbron, 1988)。

- (7) Annan (1984). こが、Eyerman et al. (1987) が編纂した論集にみられるように、関心は続いている。

- (8) Kerr (1995). Turner (1996). 拙著を多くの文献に加えることには気がとがめるが、Rothblatt (1997) を参照。Dreze & Debelie (1968) 'Bienayme (1986) も参照のこと。

- (9) たとえば、Hofstadter & Metzger (1955) 'および' Hofstadter (1996) による名著を参照のこと。グレイム C・ムーディ (Graeme C. Moodie) は Moodie (1996) において、本件に関する神経質な政治科学者の思想を語っている。

- (10) しかし、あたらしい記述については、Shattock (1994) を参照。

- (11) これを開始したのは Stewart (1989) である。

- (12) Willis & Clark (1988). Turner (1984). Horowitz (1984). Fogan (1989, 1984). Forgan & Gooday (1994). Widmalm (1993). Gordon & Dolev (1993) も参照のこと。Friese & Wagner (1993) は、ベルリンのフリードリヒ・ウィルヘルム大学とビーレフェルト大学の、研究室と実験室の場所の利用法について論じている。

- (13) Marsden (1994). Marsden & Longfield (1992). Gleason (1995). イングランドについては、意図した目的は異なるが、McClelland (1973) を参照。

- (14) イングランドのパブリック・スクール、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、および大英帝国における諸競技に関する、J・A・マンガ (J. A. Mangan) の数々の研究がこれに該当するし、かれが奨励してきたそれ以外の文化に関する著作は『国際スポーツ史雑誌 (International Journal of Sports History)』に掲載されている。Thein (1994) も参照のこと。

- (15) Wittrock (1993) に収められた、豊富な文献目録を参照のこと。これは研究の使命と国家の機能に関して、社会科学という学問の歴史的発展に関与した社会学者たちの文献目録である。
- (16) 組織および専門的活動の単位としての学科の機能と重要性は、Trow (1976) によって論じられている。
- (17) Kerr & Gade (1989) は、歴史家が尋ねそうな問題についての手引きを与えてくれる。しかし、有意義な資料は Leslie (1992) に掲載されている。
- (18) スコットランドの一大学の学生をめぐるかなり最近の本については、Anderson (1988) 参照。アメリカの歴史文献は、ここ数十年については Fass (1977) が結構役立つ。大学の学内文化を幅広い社会的変化との関連で探究した図書目録には、Levine (1986) も追加されなければならない。学部学生という青年層を形成した文化の力については、Kett (1977) を参照。Horowitz (1987) は『キャンパス・ライフ (*Campus Life*)』において、長期間にわたるアメリカの学部生を取りあげている。
- (19) 好例として、Finkelstein (1991) 'Grafton (1981)' Grafton & Jardine (1982, 1986, 1990) を参照。

## 文献目録

- Albiseti, J. C. (1994) The decline of the German mandarins after twenty-five years, *History of Education Quarterly*, 34, pp. 453-466.
- Anderson, R. (1988) *The Student Community at Aberdeen, 1860-1939*. Aberdeen, Aberdeen University Press.
- Annales (1994) *Les Annales de la Recherche urbaine*, 61, special edition devoted to universities and cities.
- Annan, N. (1984) *Leslie Stephen, The Godless Victorian*. New York, Random House.
- Bender, T. (ed.) (1988) *The University and the City from Medieval Origins to the Present*. New York and Oxford, Oxford University Press.
- Bienaymé, A. (1986) *L'enseignement supérieur et l'idée d'université*. Paris, Économica.

- Bryant, M. (1979) *The Unexpected Revolution : a study in the history of the education of women in the nineteenth century*. London, Institute of Education.
- Burke, C. B. (1982) *American Collegiate Populations : a test of the traditional view*. New York, New York University.
- Burrage, M. (1993) From practice to school-based professional education : patterns of conflict and accommodation in England, France, and the United States, in : S. Rothblatt & B. Wittrock (eds) *The European and American University since 1800, Historical and Sociological Essays*. Cambridge, Cambridge University Press, pp. 142-187.
- Carnochan, W. B. (1993) *The Battleground of the Curriculum, Liberal Education and American Experience*. Stanford, Stanford University Press.
- Carter, I. (1990) *Ancient Cultures of Conceit, British University Fiction in the Post-war Years*. London and New York, Routledge.
- Clark, B. R. (1977 / 1992) *Academic Power in Italy : bureaucracy and oligarchy in a national university system*. Chicago, University of Chicago Press. ; and *The Distinctive College*. New Brunswick, NJ and London, Transaction Publishers, originally published 1970.
- Clark, B. R. & Neave, G. (1992) *The Encyclopedia of Higher Education*, 4 vols. Oxford, Pergamon Press.
- Collini, S., Winch, D. & Burrow, J. (1983) *The Noble Science of Politics : a study of nineteenth-century intellectual history*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Dahrendorf, R. (1995) *LSE, A History of the London School of Economics and Political Science 1895-1995*. Oxford, Oxford University Press.
- Dover, K. (1994) *Marginal Comment*. London, Duckworth.
- Drèze, J. & Debellet, J. (1968) *Conceptions de l'université*. Paris.
- Duberman, M. (1972) *Black Mountain, An Exploration in Community*. New York, E. P. Dutton.



- Dyhouse, C. (1995) *No Distinction of Sex, Women in British Universities, 1870-1939*. Bristol, PA, UCL Press.
- Dzuback, M. A. (1991) *Robert M. Hutchins, Portrait of an Educator*. Chicago and London, University of Chicago Press.
- Elzinga, A. (1993) Universities, research, and the transformation of the state in Sweden, in : S. Rothblatt & B. Wittrock (eds), *The European and American University since 1800, Historical and Sociological Essays*. Cambridge, Cambridge University Press, pp. 191-233.
- Eyerman, R., Svensson, L. G. & Soderqvist, T. (eds) (1987) *Intellectuals, Universities, and the State in Western Modern Societies*. Berkeley and Los Angeles, University of California Press.
- Fass, P. (1977) *The Damned and the Beautiful, American Youth in the 1920s*. New York, Oxford University Press.
- Finkelstein, B. (1991) Classrooms as fictitious message systems, 1790-1930, *History of Education Quarterly*, 31, pp. 463-488.
- Forgan, S. (1989) The architecture of science and the idea of a university, *Studies in History and Philosophy of Science*, 20, pp. 405-433.
- Forgan, S. (1994) The architecture of display : museums, universities and objects of nineteenth-century Britain, *History of Science*, 32, pp. 139-162.
- Forgan, S. & Gooday, G. (1994) A fungoid assemblage of buildings : diversity and adversity in the development of college architecture and scientific education in nineteenth-century South Kensington, *History of Universities*, 13, pp. 153-192.
- Friese, H. & Wagner, P. (1993) *Der Raum des Gelehrten, Eine Topographie akademischer Praxis*, Berlin.
- Garland, M. *Cambridge Before Darwin, The Ideal of a Liberal Education 1800-1860*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Geiger, R. (1986) *To Advance Knowledge, The Growth of American Research Universities, 1900-1940*. New York and Oxford, Oxford University Press.
- Gleason, P. (1995) *Contending with Modernity, Catholic Higher Education in the Twentieth Century*. New York & Oxford, Oxford University Press.

- Gordon, H. & Dolev, D. (1993) Architecture and university education : the case of the Hebrew University, *Teachers College Record*, 94, pp. 800-814.
- Grafton, A. (1981) Teacher, text and pupil in the Renaissance class-room : a case study from a Parisian college, *History of Universities*, 1, pp. 37-70.
- Grafton, A. & Jardine, L. (1982) Humanism and the school of Guarino : a problem of evaluation, *Past and Present*, 96, pp. 61-73.
- Grafton, A. & Jardine, L. (1986) *From Humanism to the Humanities : education and the liberal arts in fifteenth and sixteenth-century Europe*. Cambridge, MA, Harvard University Press.
- Grafton, A. & Jardine, L. (1990) 'Studied for action' : How Gabriel Harvey read his Livy, *Past and Present*, 129, pp. 30-79.
- Greenberg, M. & Zenchelsky, S. (1993) Private bias and public responsibility : anti-Semitism at Rutgers in the 1920s and 1930s, *History of Education Quarterly*, 33, pp. 295-320.
- Halsey, A. H. (1992). *The Decline of Donnish Dominion. The British Academic Professions in the Twentieth Century*. Oxford, Clarendon Press.
- Halsey, A. H. (1996) *No Discouragement*. London, Macmillan.
- Hammerstein, N. (1989) *Die Johann Wolfgang Goethe Universität Frankfurt am Main*, I, 1914 bis 1950. Frankfurt, Alfred Metzner Verlag.
- Harte, N. (1986) *The University of London 1836-1986*. London, Athlone Press.
- Heilbron, J. L. (1986) *Dilemmas of an Upright Man*. Berkeley, Los Angeles and London.
- Heilbron, J. L. (1988) *Max Planck, Ein Leben für die Wissenschaft 1858-1947*. Stuttgart, S. Hirzel Verlag.
- Heilbron, J. L. & Seidel, R. W. (1989) *Laurence and His Laboratory, A History of the Lawrence Berkeley Laboratory*, I. Berkeley, Los Angeles and Oxford, University of California Press.

- Herbst, J. (1982) *From Crisis to Crisis, American College Government 1636-1819* Cambridge, MA and London, Harvard University Press.
- Herbst, J. (1996) *The Once and Future School, Three Hundred and Fifty Years of American Secondary Education*. New York and London, Oxford University Press.
- Herbst, J., Geitz, H. & Heideking, J. (1995) *German Influences on Education in the United States to 1917*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Hofstadter, R. (1996) *Academic Freedom in the Age of the College, with a new introduction by R. L. Geiger*. New Brunswick, NJ and London, Transaction Publishers, first published in New York, 1995.
- Hofstadter, R. & Metzger, W. (1955) *The Development of Academic Freedom in the United States*. New York, Columbia University Press.
- Horowitz, H. (1984) *Alma Mater, Design and Experience in the Women's Colleges from their Nineteenth-Century Beginnings to the 1930s*. New York, Knopf.
- Horowitz, H. (1987) *Campus Life, Undergraduate Cultures from the End of the Eighteenth Century to the Present*. New York, Knopf.
- Kerr, C. (1995) *The Uses of the University*. 4th edn (Cambridge, MA and London, Harvard University Press), first published 1963.
- Kerr, C. & Gade, M. L. (1989) *The Guardians : Boards of Trustees of American Colleges and Universities*. Washington, DC, Association of Governing Boards of Universities and Colleges.
- Kett, J. F. (1977) *Rites of Passage, Adolescence in America 1790 to the Present*. New York, Basic Books.
- Kimball, B. A. (1995) *Orators and Philosophers, A History of the Idea of Liberal Education*. New York, College Entrance Examination Board, 1995, expanded edn. First published by Teachers College Press, New York, in 1986.

- Klingenstein, S. (1991) *Jews in the American Academy 1900-1940, The Dynamics of Intellectual Assimilation*. New Haven and London, Yale University Press.
- Lagemann, E. (1989) *The Politics of Knowledge, The Carnegie Corporation, Philanthropy, and Public Policy*. Middletown, CT, Wesleyan University Press.
- Lagemann, E. (1996) *Contested Terrain: a history of educational research in the United States, 1890-1990*, Report for the Spencer Foundation, Twenty-Five Years of Grantmaking. Spencer Foundation, October.
- Leslie, W. B. (1992) *Gentlemen and Scholars, College and Community in the 'Age of the University' 1865-1917*. College Park, PA, Pennsylvania State University Press.
- Levine, D. O. (1986) *The American College and the Culture of Aspiration 1915-1940*. Ithaca and London, Cornell University Press.
- Liedman, S. -E. (1993) In search of Isis: general education in Germany and Sweden, in S. Rothblatt & B. Wittrock (eds), *The European and American University since 1800, Historical and Sociological Essays*. Cambridge, Cambridge University Press, pp. 74-106.
- Lindqvist, S. (ed.) (1993) *Center on the Periphery, Historical Aspects of 20th Century Swedish Physics*. Canton, MA, Science History Publications / USA.
- Lock, R. M. (1989) *Management and Higher Education since 1940, The Influence of American and Japan on West Germany, Great Britain and France*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Marsden, G. M. (1994) *The Soul of the American University, From Protestant Establishment to Established Nonbelief*. New York and Oxford, Oxford University Press.
- Marsden, G. M. & Lonfield, B. J. (1992) *The Secularization of the Academy*. New York, Oxford University Press.
- McClelland, C. (1980) *State, Society and University in Germany, 1700-1914*. Cambridge, Cambridge University Press.

- McClelland, C. (1991) *The German Experience of Professionalization, Modern Learned Professions and Their Organizations from the Early Nineteenth Century to the Hitler Era*. Cambridge, Cambridge University Press.
- McClelland, V. A. (1973) *English Roman Catholics and Higher Education 1830-1903*. Oxford, Clarendon Press.
- Moodie, G. C. (1996) On Justifying the different claims to academic freedom, *Minerva*, 34, pp. 129-150.
- Rashdall, H. (1895) *The Universities of Europe in the Middle Ages*, 3 vols. (Oxford, Oxford University Press, 1895, new edn 1936, reprinted 1969).
- Robin, R. (1995) *Barb-wire Colleges : re-educating German POWs in the United States during World War Two*. Princeton, Princeton University Press.
- Rothblatt, S. (1997) *The Modern University and Its Discontents, The Fate of Newman's Legacy in Britain and America*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Sanderson, M. (1972) *The Universities and British Industry 1850-1970*. London, Routledge and Kegan Paul.
- Shattock, M. (1994) *The UGC and the Management of British Universities*. Ballmoor, Bucks, Society for Research into Higher Education and Open University Press.
- Softer, S. N. (1994) *Discipline and Power, The University, History and the Making of an English Elite, 1870-1930*. Stanford, Stanford University Press.
- Stewart, W. A. C. (1989) *Higher Education in Postwar Britain*. London, Macmillan.
- Thelin, J. R. (1994) *Games Colleges Play, Scandal and Reform in Intercollegiate Athletics*. Baltimore and London, John Hopkins University Press.
- Torsteadahl, R. (1993) The transformation of professional education in the nineteenth century, in : S. Rothblatt & B. Wittrock (eds.), *The European and American University since 1800, Historical and Sociological Essays*. Cambridge, Cambridge University Press, pp. 109-141.

- Trow, M. (1974) Problems in the transition from elite to mass higher education, in: *Policies for Higher Education*. Paris, Organisation for Economic Co-operation and Development.
- Trow, M. (1975) The public and private lives of higher education, *Daedalus*, 2, pp. 113-127.
- Trow, M. (1976) The American academic department as a context for learning, *Studies in Higher Education*, 1, pp. 11-22.
- Trow, M. (1991) Comparative perspectives on American higher education, in: M. Trow & T. Nybom (eds.), *University and Society : Essays on the Social Role of Research and Higher Education*. London, Jessica Kingsley.
- Trow, M. & Halsey, A. H. (1971) *The British Academics*. London, Faber & Faber.
- Trow, M. & Rothblatt S. (1992) Government policies and higher education : a comparison of Britain and the United States, 1630-1860, in: C. Crouch & A. Heath (eds.), *Social Research and Social Reform*. Oxford, Clarendon Press, pp. 173-216.
- Turner, F. M. (ed.) (1996) *The Idea of a University, John Henry Newman*. New Haven and London, Yale University Press.
- Turner, P. V. (1984) *Campus, An American Planning Tradition*. Cambridge, MA and London, MIT Press.
- Widmalm, S. (1993) Vetenskapens korridorer : Experimentalfysikens institutionalisering I Uppsala 1858-1910, *Lychnos*.
- Willis, R. & Clark, J. W. (1988) *The Architectural History of the University of Cambridge*, 3 vols., Cambridge, Cambridge University Press, first published 1886.
- Willson, F. M. G. (1995) *Our Minerva, The Men and Politics of the University of London, 1836-1858*. London, The Athlone Press.
- Wittrock, B. (1993) The Modern University : the Three Transformations, in: S. Rothblatt & B. Wittrock (eds.), *The European and American University since 1800, Historical and Sociological Essays*. Cambridge, Cambridge University Press, pp. 303-362.